

自閉スペクトラム症 教育実践から考える

障害児教育・支援の現場では、自閉スペクトラム症の子どもたちへの実践をどう考え、とりくんでいくかが、日々検討されています。

自閉スペクトラム症の子どもたちの「障害特性」が強調される傾向が強くなり、目の前の子どもたちの姿をなんとか変化させようと特性に応じた指導がおこなわれることもあるでしょう。それぞれの現場のなかで「これでいいのか」と迷いながら、「こんな実践がしたい」という思いがかなわないもどかしさを感じることもあるのではないのでしょうか。教職員不足や管理・統制の強化、多忙化が増し、さまざまな考えをもっている人もいるなかで、教職員集団が共通理解をもって実践にとりくむことのむずかしさに思い悩むこともあるかも知れません。

今回の特集では、特別支援学校の小学部から高等部までのそれぞれの時期において、自閉スペクトラム症の子どもたちへの実践で大切にしたい視点を学びます。特性だけにこだわらず、子どもたちのねがいが育つ教育や支援について考えていきたいと思います。



自閉症教育における支援プログラムとの 「ほどよい」つきあいかた

心機一転

新年度がはじまりましたね！心機一転、気持ちも新たに、子どもとかわらうと考えているかたも多いでしょう。今月号の特集である自閉症スペクトラム障害（ASD）の子どもや仲間とかわかることになった保育者・先生方もおられると思います。

新年度が動き出すと、いろいろ学びたくなります。そんなとき、少なくとも実践者が、関心を寄せるのは、「●●プログラム」「●●療法」です（ここでは「プログラム」で統一します）。ASDの子どもや大人を対象としたプログラムにはTEACCHプログラムなどさまざまなものがあります。本稿では、このプログラムとの距離感について考えます。

プログラムの特徴と魅力

プログラムとはなにをさすのでしょうか。プログラムとは、一般的には、予定や、計画、手順、式次第などの意味をもちます。このような定義を参考にすれば、障害児を対象にしたプログラムには、次の3つの特徴があります。

1つは、具体的という特徴です。プログラムの場合、「次になにを教えるか」という手順が明確に決められていたり、評価についても、その基準が具体的に示されています。教材・教具も多くの場合、具体的なものが準備されています。

2つは、再現可能性という特徴です。再現可能性とは、同じような子どもに、同じように教えれば、同じような結果（子どもの行動変化）が得られるということです。たとえば、話し言葉のないASDの子どもに対して、子どもの動作を真似すれば、アイコンタクトが増加したという結果をもとに、別の話し言葉のないASDの子どもに実施しても、同じような結果になることを重視するものです。

神戸大学

赤木和重

